

仙台法務局長賞

相手を理解するために

白石市立白石中学校二年

小 関 義 恭
こ せ き よ し す け

私は小学校の卒業をきっかけに、約三年間伸ばし続けた髪を切った。ヘアドネーションをするためだ。ヘアドネーションとはヘアー（髪の毛）とドネーション（寄付）を組み合わせた言葉で、寄付された髪の毛を使用してウィッグを作り、病気や事故などで髪の毛を失った子供たちに無償で提供する活動のことだ。

私が初めてヘアドネーションに興味を持ったのは、男の子がヘアドネーションをしたという新聞の記事を読んだ時だった。記事を見て（男の子でもできるんだ。すごいな。）と感心していたところ、母に「やってみたら」と言われた。私は保育園の時に髪が長かったこともあり（髪を伸ばすだけで簡単そうだし、誰かのためになるんだ）とやらってみようかな」という軽い気持ちで髪を伸ばし始めた。

はじめのうちは、髪が伸びてきても誰も気にしなかった。だが、髪が結ぶくらいの長さになると、学校で上級生から「女みたい」とか「気持ち悪い」と言われ、いじられるようになった。また、商業施設のトイレなどでは知らない人たちから、じろじろ見られるようになった。他にも（他人の髪の毛で作ったものなんてなんか気持ち悪い）というヘアドネーションに否定的な意見や、ウィッグはしたくないけれど、髪がない

と変な目で見られるから仕方なくウィッグを付けているという話を聞いたこともあった。私は自分のできることを否定されているようで（嫌な思いをしてまでヘアドネーションはする必要があるのか。誰の為なのか。）と考えるようになった。そして、ヘアドネーションはやめた方がよいのではないかと悩んだ。

しかし、小さい時から同じ保育園だった同級生たちからは、「保育園の時みたいで懐かしい」と言われただけで、「女みたい」とか「気持ち悪い」と言われたことはなかった。また、久しぶりに会った遠方の友達も髪の毛の長い私を見ても何も言わず、普段通りに接してくれた。私に「女みたい」とか「気持ち悪い」と言ってきた上級生に対して私は何も言わなかったが、私が髪を伸ばしている理由を先生に聞いた上級生は「お前すごいな、女みたいとか言ってるごめん。」と謝ってくれた。そして事情を知らないほかの人たちが、私のことをかからかってきた時には、注意してくれるようになった。私は自分がしていることを認めてもらえたうれしさもあり（せっかくなか始めたことだし、必要としている人がいるのであれば、自分にできることをやろう）と考えるようになった。

私は以前、長年ボランティアに携わってきた俳優の杉良太郎さんについての記事を見たことがある。杉さんは、東日本大震災の直後に行った被災地ボランティアについて「偽善や売名ではないか」と聞かれた時に「偽善で売名ですよ。偽善のために今まで自腹でお金を使ってきたんです。そういう風におっしゃる方もぜひ自腹でお金を出して名前を売ったらいいですよ。」と書いていたと書いてあった。また、「お金も時間もない人は、福祉に対する理解を示し実際に活動している人に拍手を送るだけでも十分なんです。」と書いていたとも書いてあった。そして、能登半島地震の時も同じようなことを言われたときに「被災者にはそんなこと言っている暇はないんだよ。明日は我が身。みんなで協力していくしかないんだよ。」と書いていた。私はこの記事を見た時に、私だったら、自分のしていることを「偽善だ」とか「売名だ」とか言われたら、全力で否定するのではないかと思った。だが、杉さんは否定することなく自分のボランティアに対する考え方を

伝えていた。私は、こんな考え方をする人もいる事にとっても驚いた。そして、(必要としている人に対して自分ができることをするのに誰かに何かを言われる必要はないのだ。自分が良いと思ったことに自信を持つ。)と考えるようになった。

私が髪を伸ばしたことでいろいろな人に言われたり、じろじろ見られたことは、髪を失ってしまった人たちが実際に言われたり、されたりしていることではないか。私は自分の意志で髪形を選択できるが、自分の意志ではどうしようもない人たちもいる。ウィッグなんてつけたくないけれど、変な目で見られるから仕方がない。という人たちもいる。だがもし誰か一人でも私の髪の毛を必要としているのであれば、協力できる自分が協力すれば良いのだ。必要でない人が自分の意見を言うのは自由だ。だが、行動を起こしている人や必要としている人に対しては、その行動を否定せず見守ってほしい。

私はヘアドネーションを通して自分と反対の立場を経験し、立場の違う相手のことを理解するのは大変な事なのだと感じた。その立場になって初めてわかることも多い。最初から相手を否定するのではなく、相手の立場を理解し認めようと努力することが、お互いに必要なのだと思った。

宮城県人権擁護委員連合会長賞

涙の理由

氏名非公表

七ヶ浜町立七ヶ浜中学校 三年

私には、小さい頃からよく遊んでいる仲の良いところがある。いとこは親戚の中でも数少ない女子であり、男子ばかりいる中で唯一なんでも話せる大切な存在だった。

今から数年前、毎年恒例の親戚が集まる正月に、そのいとこから全員に向けて発表があった。「男になろうと思っている」と、打ち明けられた。その言葉を聞いた瞬間、私は驚きのあまり頭の中が真っ白になり、気づいたら涙が止まらなくなっていた。普段めったに泣くことのない私だったが、その時は訳も分からずただ涙が止まらなかった。なぜ涙が止まらなかったのか、いとこのその大きな決心の重みはかりしれないことが、私の心のどこかに感じていたのかもしれない。それから、いとこが今まであった自分の性別の違いについて話してくれた。「女の子だからスカート履く」「女の子だから髪の毛は長く」という事に息苦しさを感じていた事。成人式で着る振袖を泣くほど嫌がって着た事。いとこが長い間その気持ちを誰にも言えずにずっと一人で心の中に閉じ込めてきたというのだった。

そんないとこに、ある大切なパートナーとの出会いがあった。この人と一緒に生きていきたいと思うよう

になったのだった。日本では同性同士の結婚が認められていない。そこでいとは男になる決断をした。結婚して本当の自分として生きるために。

性別を変えるには、身体を変える手術が必要だった。痛い思いをして、費用もかかり、心も身体も大きな負担がある。それでもいとは自分らしく生きるためにその決断がぶれることはなかった。

どうしてそこまでしないといけないんだろう。なぜ好きな人と結婚するために痛い手術をしなければならぬのだろうか。どうして本当の自分であるためにこんなに苦しまなければならないのだろうか、私は何度も思った。

はじめ、私はいとこが男になることにとてもショックを受けたが、その後一緒に接するいとは、今までと見た目や声など変わったものもあつたが、いとこの性格、優しさ、笑顔などは、全く変わっていないかつた。むしろ前よりも明るく、生き生きとして自信を持っているように思えた。

私自身、これまで勝手に男はこうではないといけない。女はこうあるべきだといった考えを持っていたところがあつたが、その考え方が人を苦しめていることがあるんだということに気づかされた。社会ではまだ人はこうあるべきという考え方があつたが、人はひとりひとり皆違つていいし、しばられる必要はないと思う。

私は今回の経験を通じて、「ジェンダー」について深く考えるようになった。人が自分らしく生きることとはとても大切であり、その自由が奪われると人は大きく苦しむのだと感じた。けれど、まだ社会には性別や見た目による差別が残つていて、夢や進路さえも制限される人がいる。本来、人は誰でも安心して暮らし、自分の生き方を選ぶ権利をもっているはずだ。だから私は、誰一人苦しめない社会をつくり、性別や見た目の人を決めつけず、自由に生きられる社会にしたい。そして、苦しんでいる人に寄り添い、その力になれる人間になりたい。

河北新報社賞

優しい世界へ

石巻市立湊中学校 二年

小 山

迅

僕には、軽度の知的障害をもつ弟がいます。弟には、人と話すことが苦手になってしまふ「場面緘黙症」や、「こうなつたらどうしよう」と強い不安を感じてしまふ「全般性不安障害」など、いくつかの特徴があります。最初に詳しい検査を受けたのは、弟が小学校高学年の頃でした。「グレーゾーン」という言葉があります。白でも黒でもなく、その中間にあるあいまいな状態を指す表現です。弟がこれから先、つらい思いを少しでも減らしていけるように、そして弟らしく安心して過ごせるようにと、家族みんなで理解しようと決めたことが、検査のきっかけでした。

けれど、僕にとつて弟は生まれたときからずっと一緒にいる存在です。だから「障害」という言葉を聞いても、不思議に思ったことも、弟をおかしいと思つたことも一度もありませんでした。ただ「これが弟の性格なんだな」と自然に受けとめてきました。家の中では、弟はとてもよく話しますし、兄弟げんかだつて普通に出ます。きっと、弟にとつて家は唯一、自分らしく安心して過ごせる場所なのだと思います。けれど外に出ると、弟は人前で言葉を出せなくなつてしまふ。その代わりに、にこにここと笑顔を見せることが多

いのです。それは、言葉にできない分、弟なりに一生懸命気持ちを伝えようとしている証なのだと思います。母から弟の障害について説明を受けたときも、僕の気持ちに大きな変化はありませんでした。ただ、小学五年生の終わりに診断が分かり、六年生から支援学級に移ると聞いたときには、正直なところ少し心配になりました。突然クラスが変わることが、弟の中で戸惑いや不安につながらないだろうかと思っただけです。しかし弟は「やっと自分らしくいられる場所が学校の中にできた」と喜んでいました。それまで友達に必死に合わせようと努力してきた分、支援学級という新しい環境が、弟にとって安心できる居場所になったのだと思います。その言葉を聞いたとき、僕も心からうれしくなりました。

心の障害は、体の障害のように外見からは分かりにくいものです。だからこそ、からかったり、面白がったりする人も世の中には少なくありません。けれど幸いなことに、僕の周りの友達とは違いました。弟が話せなくても、いつもあいさつをしてくれたり、「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれたりします。時にはゲームと一緒に楽しんでくれることもありました。そんな優しい友達に囲まれていることを、本当にありがたく思います。

僕は、弟を通して世の中の「優しさ」と「差別」の両方について考えるようになりました。もし、世の中の人たちがみんな僕の友達のように、相手を思いやる気持ちをもって接することができれば、障害のある人が大人になって社会に出たときにも、自分らしく過ごせる場所がきっとたくさんあるはずです。選択肢が広がり、自分で未来を選びとっていける環境が整っていくのではないのでしょうか。

また「グレーゾーン」という言葉についても、僕はよく考えます。この言葉自体が必ずしも悪い意味を持っているわけはありません。しかし、受けとめる人の気持ちしだいで、心に重くのしかかり、思い悩む原因になってしまうこともあると思います。時には、ささいな言葉がいじめにつながってしまうこともあるかもしれません。だからこそ、言葉を選ぶこと、そしてその使い方を考えることはとても大切なのだと思います。

僕は、「みんな違って、みんないい」という言葉が好きです。人はそれぞれ違った色を持って生きています。弟の色も、僕の色も、友達の色も、どれもかけがえのない個性です。どんな色であっても尊重され、互いに認め合える社会になってほしいと願っています。弟と一緒に過ごす中で学んだことを、これから先もずっと忘れずにいたいと思います。そして、将来は僕自身も周りの人に優しさを広げていけるような人になりたいです。

「みんなで守る」子どもの権利

七ヶ宿町立七ヶ宿中学校 二年

松川真心

「ママね。赤ちゃんができたの。でもまだ友達とかには言わないでね。」

私が小学校低学年の頃のことです。母が妊娠したことを知った私は、飛び上がって喜びました。私には兄と姉が二人いますが、妹か弟がすぐくほしかったからです。（女の子だったら一緒にプリキユアごっこしたいな。）などと夢はふくらみ、うきうきしていました。

安定期に入るまでは油断できないとはわかっていましたが、家族みんながとても喜んで、新しい命の誕生を楽しみにしていました。

そんなある日、突然母が入院したのです。私は入院した理由を知らされていなく、不安でそわそわしていました。

「なんでママ帰ってこないの？」

「わからない、なんでだろうね」

兄弟とこんな会話を交わしながら母の帰りを待っていました。

しばらく経った頃、母が帰ってきました。そして、疲れた顔で静かにこう言ったのです。

「赤ちゃんね、ダメだったの。」

その瞬間、重い空気が流れ、いつも明るい家族は皆、黙り込みました。私はこの時、初めて人は本当に死ぬんだと実感したのです。

赤ちゃんは女の子でした。家族で名前をつけ、今でも妹のことを想像で話したりしています。生まれては来なかったけれど、今でも家族の一員なのです。

妹を亡くしてから、私は乳児や子どもに関するニュースに目が止まるようになりました。

その中でも特に気になるのは、親が自分の子どもを虐待し、死なせてしまう事件です。

私の親や周りの人たちの、子どもたちへの愛情いつばいの接し方を考えると、全く信じられないことです。しかし、子どもへの虐待は、年々増え続けており、昨年度は、十八歳未満の五十二人もが虐待によって命を落としているのです。

また、児童虐待全体をみると、警察が摘発した件数は、二六四九件で過去最多なのだそうです。

マンションの一室にたった一人で八日間も置き去りにされ、衰弱死した三歳の女の子。胃の中からは、お腹が空いて食べたのか、紙切れが見つかったそうです。怖くてつらくて、きつとたくさん泣いたでしょう。少し想像しただけでも胸が苦しくなり、涙が出ます。

交際相手と旅行に行っていたという母親は、自身も小学生の頃に親から壮絶な虐待を受けた経験があり、裁判では、それが事件の背景に影響しているとされたそうです。

「虐待の連鎖」という言葉が胸に刺さりました。そして、虐待を受けた子どもは、たとえ命が残ったとしても、体や心に受けた傷は決して消えることはなく、その傷をもったまま生きていかなければならないとわかりました。それはとても残酷なことです。

では、どうしたら辛い思いをする子どもを減らすことができるのでしょうか。

中学に入ってから、この問題の私なりの答えを見つけてるきっかけに出会いました。

それは、毎日通る廊下の壁にあった「子どもの権利掲示板」です。そこには、「子どもの権利条約」がイラスト入りのカードでわかりやすく書かれていました。その四つの柱は、「生きる権利、育つ権利、守られる権利、参加する権利」です。

正直これが権利として定められていることに驚きましたが、児童虐待は重大な人権侵害なのだ、改めて考えさせられました。

掲示板には、二年前に日本で定められた、「こども基本法」も紹介されており、国全体で、すべての子どもの権利を守り、育てようとしていることを知りました。

私は、虐待を「虐待する親」と「虐待される子ども」とのせまい関係だと思っていました。でも、みんなが「守るべき子どもの権利」を知り、問題意識をもって子どもたちを見守れば、虐待は減っていくのではないかと思います、光が見えた気がしたのです。

虐待をする親は絶対許せんが、きつと辛いのだろうとも思います。金銭的な問題や精神的な問題を抱えて、相談する人もなく追い詰められている場合も多いと聞きます。

私は、大人にも相談できる環境があることをもっと知ってもらいたいと思いました。あなたの子どもも、みんなから守ってもらえると伝えたいです。社会全体を大きな家族と思えば元気が出るのではないのでしょうか。

そして、私たち子どもも、困ったら遠慮せず声を上げていい、大人たちを頼って、守ってもらっていいんだと知らせたいです。人と人との温かい心のつながりを感じることで、虐待の連鎖は断ち切れると信じています。

私は将来、福祉関係の仕事に就きたいと考えています。仕事に生かせるよう、今手話を学んでいます。大切に育ててもらったお礼は、将来に希望を持って、今を頑張ることかなと思っています。そしていつか、優しい社会をつくる一員になれるらしいです。

べガルタ仙台賞

最初のプレゼント

気仙沼市立大谷中学校 一年

高橋 祈梨
たかはし のり

私の名前は祈梨（いのり）です。私が生まれたのは、七夕の夜でした。予定日より早く生まれた私はとても小さく、生まれてすぐに看護師さんが私を処置室に連れて行ってしまったそうです。私に会えないまま別室で待つことになった母は、私が無事でいるようにと、七夕の空にお祈りしたそうです。父も祖父母も、私の無事を空に祈ったそうです。そして、その祈りが届いて、母と一緒に退院できることになった私の名前は「いのり」になりました。

「祈梨が生まれた日は、家族の祈りが夜空に届いた日。祈梨も、いつか誰かのために祈る、優しい子に育てほしい。」

そんな願いを込めたそうです。「梨」には、「生まれた時に、とても小さかった祈梨が、すくすく大きくなるように、たくさんの実りがある人生になるように。」

という願いが込められているそうです。

「名前ってね、家族から子どもに贈る、幸せの願いを込めた最初のプレゼントなんだよ。」

母からそう言われたとき、私はとても大切な宝物を抱きしめている感覚になりました。毎年楽しみにしている誕生日やクリスマスマスのプレゼントよりも、もっともっとかけがえのない、「名前」という世界に一つだけのプレゼントを生まれた時にもらっていたことを知って、私は自分を大切にしたいと思いました。私が幸せに生きることは、それを願ってくれる家族も幸せにすることになるのだと分かったからです。

私と同じように、家族や友達、全ての人に素敵な名前があります。それは生まれた時に、幸せになってほしいと願ってくれた人がいたという証です。だから、幸せにならなくていい人なんて、誰一人としていません。

それでも、残念ながらいじめの話をする必要があります。また、聞いていて心配になるようなあだ名を使う人もいます。私自身も、心ない言葉に傷付くことがあったり、人間関係で悩む日もあります。

いじめをする人、誰かを傷付ける人は、自分の幸せしか考えていないのだと思います。その結果、相手の幸せを奪っていること、そして名前に込められた願いを壊してしまうことは恐ろしいことだと思います。

誰かと接するとき、

「素敵な名前だな。この名前にはどんな願いが込められているのかな。」

と考えながら、宝物に触れるように優しく名前を呼んで話しかけたら、きつとそれだけで、いじめや、冷たい言葉、本人の望まないあだ名はなくなっていくのではないのでしょうか。

私は「祈梨」という名前に込められた家族の願いを忘れず、自分も周りも幸せに生きられるように、優しさと思いやりを持って人と接していきたいと思っています。それは、家族がくれた最初のプレゼントに、私なりの感謝を返すことになるのだと思います。そして、名前という宝物に込められた大切な幸せの願いを、私たち一人一人が守っていける、そんな優しい世界を、私から作っていききたいです。

楽天イーグルス賞

みんなちがってみんないい

石巻市立石巻中学校 一年

小川 おがわ にこ

「野球してるんだ。カッコいいね。」

私は小学二年生の時に友達や兄の影響で野球を始めた。初めての練習に参加したとき、そこには見たことのない景色があり、とても楽しそうだと思った。最初の頃は楽しむことだけで野球をしていた。だけど、学年が上がっていくにつれて、どんどん「上手くなりたい」、「試合に出てみたい。」などの気持ちが強くなっていった。

私は小学校のころ、体育の授業でドッジボールやソフトボールをする時、男子の方に、混ざってやるが多かった。「野球してるしね。」「強いもんね。」などとたくさん言われてきた。時には「にこさん男子の方でしょ。」と言われることもあった。その言葉を言われた時は、自分を理解してくれてるんだとか嬉しいな、と純粹に思っていた。けれど、何だかちょっと、「自分だけ。」と思ってしまう私もいた。たくさん女子がいるのに、その中でも私だけ男子に混ざっていることに、どうしても違和感を抱いてしまった。

野球が好きで、上手くなりたい。男子にだって負けなくらい強くなりたい。そう思っているけど、「これ

いいのか。」という不安はぬぐいきれず、少し迷いながら練習をしていた。

そんな時に初めて「女子野球」という女子だけで野球をするというチームがあることを知った。そのチームにはちがうチームの女子、そのチームで活動すると女子だけにしかない楽しさというものがあった。今までは男子とやってきた野球も女子だけでできるんだ。とその時にとっても満足していた。

私は小学六年生になり、チームのキャプテンになった。その時は「にこちゃんがキャプテンか。」などと批判的なことを言う人もいた。私はそれを聞いて、「やっぱり女子の私じゃ務まらないか。」と不安な気持ちになってしまった。しかしすぐに絶対に私でよかったと思わせてやるという前向きな気持ちにもかわった。キャプテンとしてチームを最後まで引っぱることができたこと。チームで野球をしていくうちにたくさん優勝もしてたくさんうれしい気持ちを味わってきた。

チームを卒団する時、「にこちゃんがキャプテンでよかったな。」と書いてもらったかは分からないけど、私はこのチームで、このメンバーで野球をすることができてとてもよかったなと思った。

そして中学校に入り、野球部に入った。もちろん女子は一人。でも、女子一人でも男子には絶対に負けない、絶対レギュラーになってやる。という強い気持ちでいる。

私は一人の女の子として、野球をやって、ここまでくるのに苦しい思いもしてきた。でもその中で言われた、「野球してるんだ。カッコいいね。」という言葉にすごく救われた。「女子だけど野球していいんだ。周りとは違っていてもいいんだ。」と思えた。野球を通じて、仲間と協力する楽しさや、「自分らしくいいんだ。」と自分自身の心も成長することができたと思う。

私はこれからも野球をつづける。周りからなんと言われたって、思われたって、私が一番私そのままいられる野球を手離したくないから。女の子だってスポーツをする。今は女子の野球人口も増えてきて、私と同じような不安や迷いがかかっている子だってたくさんいると思う。だからと言って野球をやめてほしくはな

い。私は自分の経験から諦めないでここまで来たこと、苦しい思いをしたその先には明るい「今」があることを伝えたい。

性別にとらわれず、自分のやりたいことを胸をはってやってほしい。女子だから、女子なのにといい言葉を言ってしまう。人によって輝ける場所は違うからそれを否定しないでほしい。「一人一人違う色をもっている」と思えるような今や未来にしていきたい。

一人一人違っていい。自分だけの色で輝ける未来に向けて。

仙台89FRS賞

「普通」ってなんだろう

石巻市立湊中学校 三年

萱^か場^{やば}心^こ音^こ

私たちの生活の中で、「普通」という言葉はさまざまな場面で使われています。例えば、友達と食事をしたときに「普通に美味しいね」と感想を言ったり、進学の際に「普通科」という表現に出会ったりします。一見すると当たり前のように使われる言葉ですが、よく考えてみると「普通」とは一体何を意味しているのでしょうか。私は日常生活の中で、この言葉がどのように使われているのか意識してみたいと思いました。

ある日、学校で友達と話しているとき、私はある疑問を口にしました。すると友達から「普通に考えたらわかるでしょ」と返されました。確かにそうかもしれないと思いつつ、心の中で「普通って何だろう」と考え込みました。また、家で家族と会話をしているとき、「女の子なんだから普通にもっと可愛らしい服を着た方がいいの」と言われたこともあります。さらに、別の場面では、ある男の子が大人から「子供でも男なんだから泣くな」と言われているのを耳にしました。そのとき私は、子供はまだ感情のコントロールがうまくできないこともあるのに、なぜそんな厳しい言葉を投げかけるのだろうと疑問に思いました。

こうした経験を重ねるうちに、私は「普通」という言葉の使われ方に気づきました。それは、多くの場合

「自分にとっての当たり前」を相手に押しつけるときに使われるのではないか、ということ。そしてその言葉は、相手の行動や気持ちを縛りつけてしまう力を持っていると感じました。

しかし一方で、「普通」という基準は時代や社会によっても変化します。昔は「女の子だから可愛い服を着る」「男の子だからかっこいい服を着る」というのが普通だったかもしれない。けれど現代では「自分が着たい服を着る」ことが尊重されるようになってきています。また、社会的な視点で考えると、盲目の人にとっては点字ブロックを使いながら買い物をするのが「普通」であったり、車椅子の人にとってはスロープやエレベーターを利用することが「普通」であったりします。このように「普通」というものは、その人の立場や状況、環境によってまったく違うものになるのです。

つまり、誰かにとっての「普通」が、必ずしも他の人にとっての「普通」とは限りません。むしろ、世の中には無数の「普通」が存在していて、その多様さこそが人間社会の豊かさなのではないかと思えます。それにもかかわらず、「普通にすべき」と決めつけてしまうことは、相手の可能性や個性を狭めてしまう危険性をはらんでいます。

私自身、これまで「普通」という言葉を深く考えずに使ってしまうことがありました。しかし改めて振り返ると、その言葉が誰かを傷つけたり、不自由な思いをさせたりすることがあるのだと気づきました。だからこそ、これからは相手を「普通」という言葉で縛りつけないようにしたいと思います。

また、自分の考えや感じ方が、他の人にとっては「普通」ではない場合もあります。けれど、それは「間違っている」ということではなく、その人の個性や価値観の表れだと受けとめたいです。人はそれぞれに違う背景や考えを持っていて、それぞれが自分なりの「普通」を抱えながら生きています。その違いを否定するのではなく、互いに認め合うことが大切だと思います。

「普通ってなんだろう」という問いは、きっと一生答えが出るものではないでしょう。けれど、その問い

を忘れずに持ち続けることこそが大事だと思います。自分の中にある「普通」を一度立ち止まって見直し、相手の「普通」と照らし合わせることで、より豊かな人間関係や社会が築けるのではないのでしょうか。

私はこれから先も、「普通」にとらわれるのではなく、「多様な普通」を尊重できるようになりたいです。そして、周りの人たちと互いの違いを認め合い、支え合いながら生きていきたいと思っています。

審査員長賞

「相手を尊重し合う一歩として」

塩竈市立第一中学校 三年

岩崎 凌空

『ごめんねと そのひと言が言えなくて 帰り支度の 君を見送る』

これは、僕が中学二年生の時に国語の授業で学習した短歌だ。当時の僕は、この短歌を目にするたび、過去の苦い出来事の記憶が蘇ってしまい、モヤモヤした気持ちになっていた。そして僕は、この短歌とともに、このときの出来事を自分の記憶から消し去ってしまいたいという思いに駆られていた。

そのある出来事というのは、今から一年前にさかのぼる。

僕は中学に入学してから仲良くなったA君と、お互いに部活がオフだった休日に、二人で映画を観に行った。そして帰り際は、いつものように「また遊ぼうな。」と言って、いつも通りのさよならをした。ところが翌日の朝から、僕は突然A君に無視されるようになった。僕はなぜ無視されるのかがわからず、はじめは、A君は僕の声がたまたま聞こえなかったんだなと思った。しかしA君は僕が近づけば近づくほど教室の外へ逃げていった。僕は負けじと追いかけていったが、それでもA君は、まるで僕と鬼ごっこでもしているかのように逃げ回った。(なんで逃げるの？何か悪いことした？) 困惑した気持ちと同時にだんだんと怒りが一

気に込み上げていた。

けれども、よく見ると、A君の表情がどこか苦しそうにも見えた。

それでも僕は、この状況に耐えられなくて、何度も話しかけようと試みた。

すると、この状況を見ていたクラスメイトのB君があることを教えてくれた。

「あ、Aね、今クラスみんなから『BL(ビーエル)』って呼ばれてるらしいよ。なんかね、Aは凌空のことが好きなんじゃね？ってみんな言ってるよ。」

どうやら詳しく聞くと、僕と一緒に遊んだことで、A君は男が好きだ、同性愛者だとクラスの一部の男子たちからかわれ、そのようなあだ名をつけられていたらしい。だからA君は、みんなにからかわれるのが嫌で、わざと僕と、不本意だけれど距離を置いていたようだった。

それを聞いて、正直僕は、なぜ周りの男子たちは、みんなと同じように、僕は友達と一緒に遊んだだけに、僕の友達をそのように言うのか、なぜ、そのような捉え方しか出来ないのか、全く理解が出来なかった。けれど、A君が僕を避けていた理由がやっとわかり、それだけでも少し安心した。

けれども、モヤモヤとした僕の気持ちは、日に日に大きくなっていった。

しばらく経つと、僕にも、A君と同じようなあだ名を、クラスの男子たちが勝手につけていたことがわかった。実際にそう呼んでいるのは一人だったけれど、周りの人たちもそれに同調して面白がっている雰囲気だった。

友達と互いにあだ名で呼び合うことは日常的によくあることだ。しかし、その呼び方が「良い」か「悪い」かは、原則として「呼ばれる本人」に決定権があると思う。本人が「良い」と思うのであれば、そのまま呼び続けることができるし、「嫌」なのであれば、どんなに呼びやすくても、周囲はそれ以上のあだ名で呼び続けることは出来ないと思う。人の呼び方に関しては、原則として、「呼ばれる本人の同意」が必要なのではな

いだろうか。たとえ、最初にそのあだ名で呼び出した一人が悪気がなかったとしても、A君が「心身の苦痛」を感じていれば、クラスの男子たちの行為は、十分「いじめ」に当たると僕は思う。

「たかが『あだ名』くらいで」「気にしなければいい」などと思う人はいるかもしれない。けれども僕は、軽はずみで考えた心無いあだ名で勝手に呼ばれるくらいなら、いつそのこと、あだ名を一斉に禁止にして、当たり前のことかもしれないけれど、自分の両親が想いを込めて付けてくれた名前でも普通に呼ばれたい。あだ名は、他人が思う以上に本人には苦痛に感じる場合や、自分を追い詰めるほどの精神的ダメージが大きい場合がある。しかし、この世に生きるすべての人は、「人権」というものを持っている。誰もが一人の人間として大切にされ、社会の中で安心して生活するために。それなのに、目の前にいる人にかける言葉で、その人を平気で傷つけている人がたくさんいる。僕はそんな日常をとっても悲しく思う。だから、一人一人が自分のこととして捉え、お互いを尊重し合う第一歩として、みんなが「言葉遣い」に気をつける習慣を身につけられたらいいのではないだろうか。例えば、日頃から相手に対して、丁寧な正しい言葉遣いをすることや、「○○さん」と名前を呼ぶだけでも、相手を尊重し温かい雰囲気を作ることが出来ると思う。

クラスのみんながそうしていくことで、またいつか、あの頃のように、A君と笑顔を交わせる日が来ることを僕は心から願っている。

宮城県中学校長会賞

一緒に場所

登米市立豊里小・中学校 八年

中野心寧

私には脳性マヒの障がいがあり車イスで生活しています。アテトーゼという自分の意志に反して体が動く不随運動があり、体や手足のコントロールが難しく、筋緊張もとても強いタイプです。何かをしようとすると、感情の高ぶりで緊張が強くなってしまいます。考えたり、力が抜けてから話すことはできませんが、日常生活は全て介助が必要です。そのため、学校へ通うにも特別な配慮が必要です。小学校、中学校への進学時にも私の大きな心配は、「自分だけ別の学校ではなく友達と同じ学校、兄弟と同じ学校へ通えるかな」ということでした。私が「同じ場所」「みんなと同じように」と願ってもそれは簡単なことではありませんでした。階段の上り下りや段差、車イス用トイレの有無、テストの受け方、災害時の動線。学校のつくりやスペースの関係で難しいことがたくさんありました。行政へ相談しても、理解をしてもらえなかったり、前例がないや心ない言葉を言われたり。「伝えるのって難しいね」と母と泣いたこともありました。「一緒に学ぶ」までに乗り越えることがたくさんありました。私は介助をしてもらっているという気持ちから、「私はこうしたい」とか「こうしたらできると思う」という思いを迷惑をかけるかなと思ってしまう、勇気を出して伝えるより

も心の中でストップをかけてしまうことも多かったです。何より一番かなしかったのは、はじめから「無理」と決められ声をかけてもらえなかったことでした。挑戦する前から「無理」と決められることは、色々なまわりの状況があったとしても辛かったです。「どうしたら私なりにできるか」を聞いて欲しかったし、一緒に考えたり相談したかったです。しかし、少しずつですが状況は学年が上がるごとに変わりはじめました。私も思いの伝え方を工夫したり、思いを勇気を出して友達や先生、家族へ伝えることで、「どうしたら一緒にできるか」「これはどうか」と相手とコミュニケーションを取れるようになってきました。お互いがそれぞれの立場でどうしたらよいかを考え、お互いが理解することが「合理的配慮」だと分かりました。私の思いや気持ちを一方的に主張するだけではなく、私も相手を理解し工夫する。その積み重ねで、一緒にできるよう早めに移動させてもらえたり、テストでiPadを使えたり、事前にシュミレーションできたり。私にできる方法を一緒に考えてもらい、たくさんの先生方や友達からの支援や配慮のおかげで私は今、クラスの一員として毎日学べる居場所があります。でも私の障がいの難しさから、体が辛く痛く、気持ちもコントロールできなく、まわりにたくさん迷惑をかけていることが多くあります。予定通りに進まなかったり、自分で伝えておいてできなかったり、待たせてしまったり。自分の体が嫌いになることもあります。でも根気よく私と向き合い、はげまし、支えてくれる先生方や、手をかしてくれ友達にいてくれることは本当にうれしいし、感謝です。「頑張ろう」「一人じゃない」と力が湧いてきます。

最近はいんクルーシブ教育という言葉も耳にします。障がいのある人もない人も共に学び共に成長すると書いてありました。私が今みんなと同じように学んでいるのは、この考えが広がってきたことと、まわりの支えと協力のおかげです。どんな人でも一人一人に人権があるからあたり前なのではなく、お互いがお互いを知り、考えるから一人一人の人権が成り立つと私は思います。まずはお互い「知ること」が何より大切だと思います。障がいや特性を知らなければ、まわりはどう接したらいいのか、何が必要なのか分かりません。

私も友達から「どう声をかけていいのかわからない」と言われました。でもそれは悪気があったからではなく、ただ知らなかっただけだと思います。障がいや特性、相手について知ることができれば、視野が広がり、相手へ優しい気持ちを持つことができます。

私が理想の形があります。それは、幼稚園、保育園、支援学校、小学校、中学校、高校、大学、老人ホームが同じ場所にある形です。色々な人がいてあたり前なら自然とお互いに助け合いがうまれると思います。人権とは、「誰でも自分らしく生きられること」だと私は思います。毎日の生活の中で、支え合い、認め合う場所がもっと広がってくれたらいいなと思っています。

仙台市中学校長会賞

重なりあう二つの心

仙台市立仙台青陵中等教育学校 三年

八月朔日 葵香

将来、司法関係の仕事に興味がある私は、昨年の秋に職場体験で少年鑑別所を見学する機会に恵まれた。非行、犯罪といった法律にふれる行為をした少年が過ごす施設を見学することに私は緊張していた。見学当日の朝、集合場所の少年鑑別所の前には、私と同様にこわばった表情の同じ班のメンバーが立っていた。

鑑別所に入ると、笑顔で職員の方が出迎えてくれた。そして、各部屋を底抜けに明るい声で案内、説明をしてくれた。ちょうど監視室の説明を受けているときだった。ある一つのモニターに映る光景に、私たち全員が目が丸くなった。モニターには「ピラティス」に取り組んでいる少年たちが映っていた。インストラクターの先生が背筋をすうーっと伸ばし、きれいな姿勢をする。少年たちも同じようにきれいな姿勢をとる。モニター越しなのに静かで深い呼吸音が伝わってくる。

「鑑別所でオシャレなイメージのピラティス？」

丸くなった私達の目はだんだんと点になり、頭の上には、はてなマークが並ぶ。

「私も、ピラティスに真面目に取り組んで、このお腹の肉を燃やしたいんですけどね。なかなか上手いかな

ないんですよ。」

と、自分のお腹をぶにとつまむ職員さん。思わず吹き出し、みんなで大笑いしてしまった。

「そう！その笑顔。この少年たちも同じ会話で笑うんだ。少年たちも皆と同じ笑顔を持っているんだ。」

職員さんのその言葉は、私の頭の中のネガティブなものを一瞬で崩していった。

まだ頭の上にはてなマークが並んでいる私達に職員さんが言葉を続ける。

「みんなも心が疲れるときがあるよね。だんだん体が重くなってきたりもするよね。心の疲れは直接みることはできないけれど、いつの間にか頭の中にも体の中にも入り込んで、疲れで支配してしまう。すると、だんだん怒りっぽくなったり、何かに八つ当たりしたくなったり。自分でも抑えられない間違った行動に走りたりしてしまう。ピラティスは心の疲れをとるのにとっても良い方法の一つです。ネガティブな感情を切り替えて、心の正しい置き場所を学ぶのにとっても役に立つんです。」

怖くて暗いイメージを持って鑑別所の見学に来た私。鑑別所は、怖い場所ではなく、心の疲れをとり安心して自分の気持ちを素直に吐き出して過ごせる場所。笑顔を自然と引き出してくれる場所であること。「自分とは正反対の考え方をする少年たちが過ごしている世界」という私の中にあつた偏見の塊が、ゆっくりとほぐされていく感覚がした。

「私達は、いろいろな面から少年たちを支えています。大変なこと、苦しい場面もあります。それでも、だんだんと自分で心を整えることを身に付けて、もがきながらも成長しようとしています。少年が私達と過ごす時間は限られています。ここで身に付けたことを社会復帰してからも持ち続けて欲しいと願って送り出します。『またね』とは言えないんです。でも、社会が少年を拒否してしまつたら、少年の心を踏みにじる言葉をかけてしまつたらどうなると思いますか？皆にも少年と一緒に笑いあう場面を大切にする社会を作ってほしいと思います。」

と、職員さんは、最後に熱い想いを伝えた。

鑑別所で、自分をいたわり、心を健やかに育てることを学んだ少年たち。社会に出てからは、他人の行動や気持ちに寄りそったり、助けたりと学びを生かすアウトプットの場がなければならぬ。あの少年は悪いことをしたことがあるから、この場所には相応しくないなどあってはならない。少年が、安心して活躍できる居場所や環境を作ってあげる社会の温かさが必要である。その温かさの積み重ねが、社会復帰を目指す少年の心に良い意味で勢いをつけてあげることができると思った。

一見難しく思えるが、職員さんが教えてくれたように「一緒に笑いあう時間」という意外とシンプルなものなのかもしれない。私達も少年たちも、過去の負に縛られず、未来に目を向け、一緒に笑顔で歩いていくことが、豊かな社会へとつながっていくのではないか。

学校に戻り、体験をまとめる私の心には新たに「しなやかさ」が育っていた。

心の疲れをとり、豊かな心を取り戻そうと努力する少年。偏見の心をもっていたことを反省し、いつか一緒に笑いあいたいと思う私。少年鑑別所は、温かい社会と一緒に生きていきたいという二つの心が重なる、優しさにあふれた場所であった。

「ピラティスの効果なのかな。」

一緒にまともに取り組む班のメンバーと笑いながら言った。